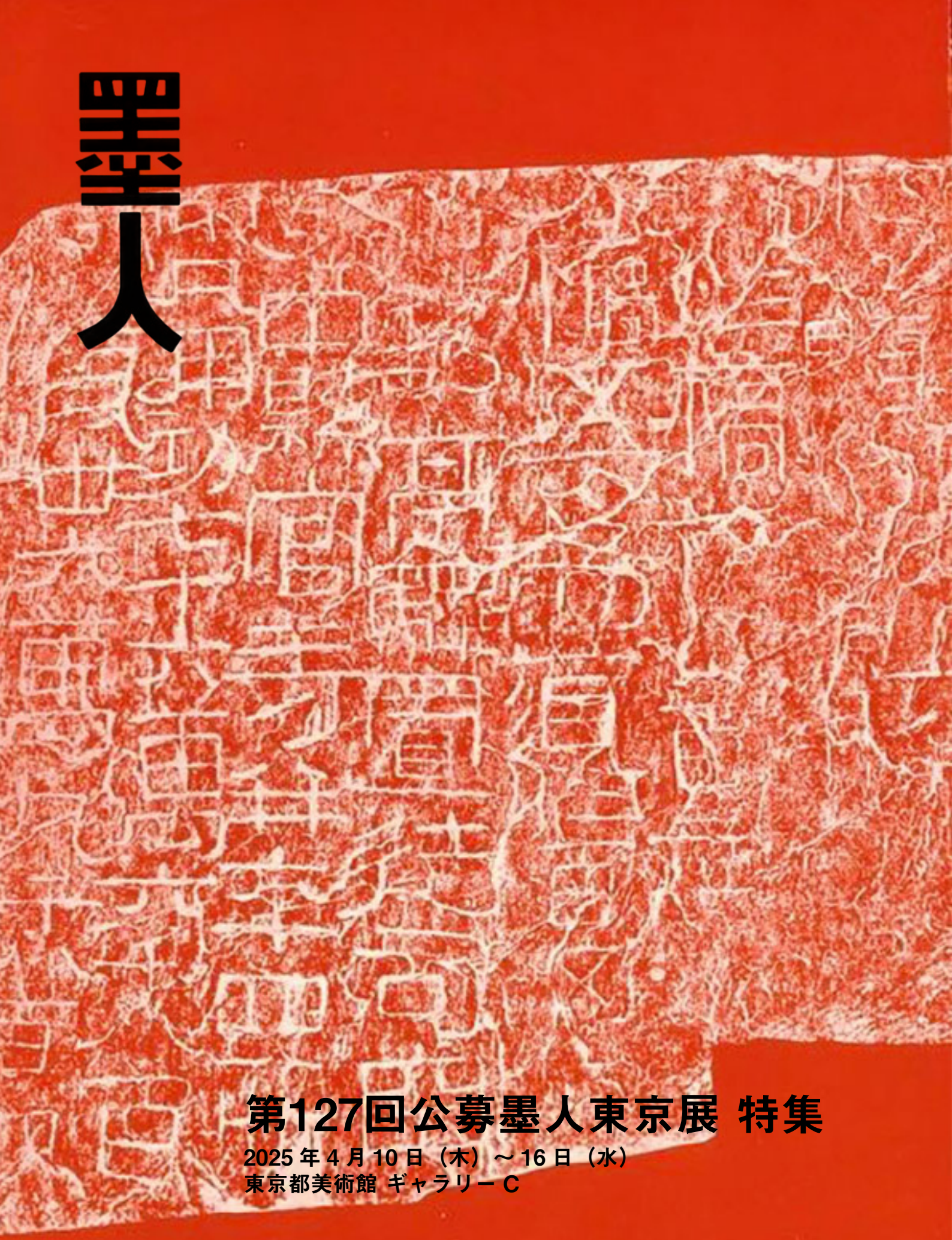
墨人



第127回公募墨人東京展 特集

2025年4月10日（木）～16日（水）
東京都美術館 ギャラリーC

BOKUJIN No.751 2025.5



樋口雅山房（北海道）「雪」 52 × 75cm

自分の作品を語ることはいつまでも恥ずかしい。初心のはじめから今とほとんど同じ感じである。何年も何十年も書いてきたが、八十歳になって何が変わったといえるだろうか。何等変わったとは思えない。



中森博文（神奈川）「虚」 125 × 79cm

作品の文字（ことば）を決めた時、先ず、どうしたら空間（白）が生かせる構図になるかと言うことを考えます。空間を生かすには、邪魔な飛沫は私には禁物です。でも時として、飛沫が生きることがあります。その辺の見極めが大切だと思っています。今回100枚程書いた中から上記の内容に近いものを選びました。



小林靖幸（大阪）「縁」 74 × 90cm

偏の下から右上に上がるところは思い切って投げだして最小限の線から後半筆が開いた手応えが新鮮でした。



矢野日出子（京都）「恤」140 × 90cm

たまたま選んだ字ですが、心に血でありいろいろイメージ出来そうな字です。紙面の汚さはちょっと本意ではありませんが、私は,思いっきり書くのみです。もっと迫力が欲しいですが、筆が開きませんでした。



渡邊佐和子（神奈川）「生」140 × 120cm

一画目、筆が挫けている。そのまま書き続けて最後までどうにか書き切りました。「筆が立ち直るチャンスはいくらでもあります」という何処かで聞いた森田子龍の言葉が蘇りました。



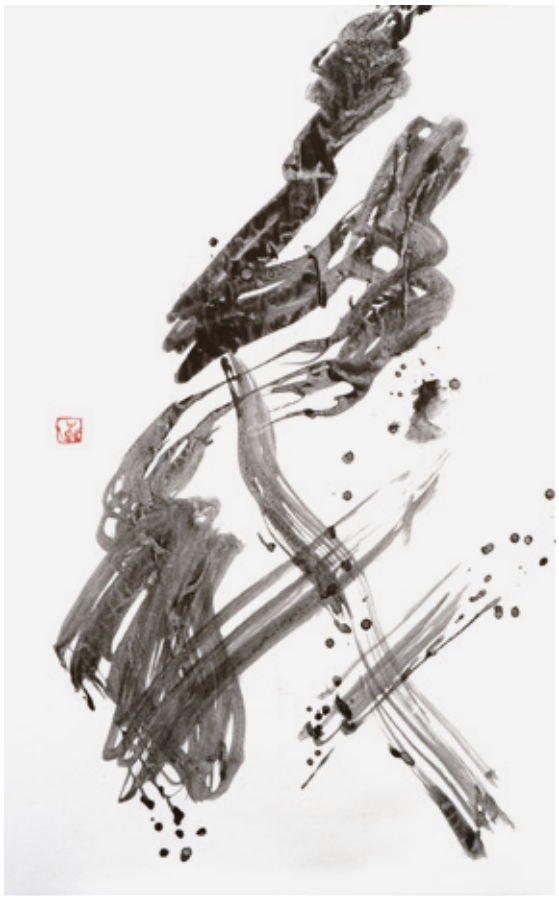
稲田宗哉（京都）「湛」120 × 140cm

偏の動きの工夫のあり様が旁の動きに捉われ曖昧になっていたこと、サンズイの動きの内に自己の存在は有るにはあるが、それが所謂「一なる全体の細部」になっていないか。



吉田敏子（北海道）「静」97 × 90cm

最終画でまたも動揺。小我を頼んでも頼りにならないことがやっと腑に落ちました。ココからの一歩を見てみたいです。



史穂呼（大分）「無我」96 × 66cm

「我」という字をずっと書き続けています。無意識に取り上げてきました。没我、砕我、徹我、我ヲ砕ク、我という一字も何回も作品化しました。今回はいよいよ「無我」という言葉を選び取っています。伐法の最後、筆が立って紙から離れた感覚を覚えています。割と楽に筆が動いて雑念が無い点は好きな作品です。筆をさらに鍛錬し70代は作品も臨書も沢山残したいです。目標とする作品の形は見えませんが方向はかなり掴めてきたと感じています。力を出し切って頑張ります。



中川萌翠（京都）「光 & 光舞」90 × 140cm

ここ二三年「光」と言うテーマから逃れられない。この光は空間の中の光の動きを表したかった事に尽きる。さて、感じられたか、どうか?



鵜飼悠生（京都）「横 超」90×140cm

出品作は納得して良し、納得出来ず次への課題を見つけて良し。今回作はそれ未満ということ、それだけ。ご覧いただいた方には申し訳なく存じます。



坂中典子（和歌山）「羅」140×90cm

厚みがない。の一言です。最後にどの作品を出品するか2〜3点で迷い、外に広がりのあるのを選んだのがこれです。展覧会場でみると厚みがないのにがっかりしました。
会場で「筆を立てていないのではないか」のアドバイスをいただきました。井上有一展を観に行かれた方には動画を見せていただき、私の書くのが速過ぎることが分かりました。もっと「ゆっくり」書こうと思います。次に書くときは、以上の2つと、「筆を高い位置から下ろす」と、「あまり押さえつけない」の4つ。



西原 泉（静岡）「道」90×140cm

筆と一つになって、意図に捉われず「道」となって動き切りたいと思って書きましたが、未だ、道遠しです。



井上富子（京都）「閑 吟」140 × 80cm

合宿の中止で出展は無理かと思っていました。書き足りない騒々しい「閑 吟」になってしまいましたが、筆を持てる場を整えてくださった墨人の仲間に感謝です。



坂井由美（東京）「衆」140 × 120cm

書き出しは前半に苦労し後半は最後のはらいに苦労しました。特にはらいは高さを保ち力がありながら鋭く入りたかったのですが、課題です。



小笹裕子（滋賀）「動」140 × 120cm

百メートル走に例えるなら、身体が温まらないままスタートするも、脚がもつれ上体だけ突っ込み、焦った中間走。ラスト近くやや立て直し、ようやく纏めた感があります。



吉松篤志（宮崎）「鷹」140 × 90cm

思いのまま、紙面を動いて、書けた実感があり、私的には会心作、自信作と思っています。



林原明美（東京）「観」140 × 90cm

起筆から最後まで書き通せたのはこれだけだった。



吉松篤志（宮崎）「鶴亀」140 × 90cm

「鶴」の最終画、最後までこの形にこだわったが、穂先が整わない中途半端な線で「亀」に繋ぐことになってしまった。もう少し単純にあっさり、サラッと「亀」に繋がる線でもよかったかもしれない。「亀」はもう少し小さく収めたかった。次作「鶴亀」に繋げたいと思う。



畠中咲菫（京都）「峯」140 × 120cm

自分の欠点はよくわかっています。殻を破れず苦しんでいる自分との戦いに又も敗れた今回の作品です。



太田秋源（北海道）「羅」140 × 90cm

筆を持つ重い時体が動いてくれない。何故か分からない。自分の作は分かることがない。自分とは何だろう。



白井つね美（静岡）「夢」140 × 90cm

1995年和歌山の南部での墨人会合宿研究会がありました。その折森田先生が超大筆二本をお持ちになって「有」をお書きになりました。すごい書でした。夢をみているようでした。そういう思いからはかけ離れていますが「夢」と書いてみることに致しました。



石原紅苑（島根）「愛」140 × 140cm

数年前に「愛」という字を書きたくなり、取り組み一年間書き続けました。その頃、他の文字に変えるように言われ、又、縁があれば…と思って書くのを止めました。その後「愛」を書きたいという気持ちが募り又書き始めました。書いても書いても飽きなくて書きたい書いても飽きなくてもっと書きたいという想いが強く「愛」という字に魅せられています。今はこの自分の気持ちを大切に素直に書き続けていきたいと思っています。



無鑑査
下水流智恵子（神奈川）「闇」140 × 120cm
門構え、起筆からの動きが定まらず不満が残ります。後半の筆の返りから終筆までは何とか空間を作れたかなと。呼吸と大筆の毛の働きが合致するに苦労しています。



無鑑査
加藤めぐみ（静岡）「承」90 × 70cm
最後まで無理なく自然に動き切ることを目標としたが、筆の運びに不自然さが残る。まだまだ書き込みが足りない。

[P01 から P08 の作品は会員作品・無鑑査作品であり自己作品のコメント、
P09 から P13 の作品は公募作品で各作品に対して会員が批評を担当しています]







秀作賞

茂木明子（東京）「聖」140 × 90cm

・骨格がしっかりして相当書き込まれた作と思われます。これに筆の弾力がある表現があったら密度が深くなり白の部分が強く生かされた。（太田秋源）

・一、二画は味のある線ですね。その後もこの調子に続けばよかったです。展覧会場で少しお話をする機会がありましたが、追究心が強く枚数も多く書かれているご様子ですね。頑張って下さい。一度、紙の底に突き抜けるような強い線で書いてみても面白いですよ。（坂中典子）



秀作賞

城 克汎（神奈川）「悟」61 × 90cm

・柔らかい線質と無駄な動きがなく好感が持てました。気になったのは後半です。少し急いだように思います。（坂井由美）

・こういった墨色の線質はなかなか分かり難い事を感じることは往々にしてありますが、 最初の縦画の 2 本が旁を支えている。 旁の最初の 1 画目から斜めに下りる線の次に筆の動きが曖昧に感じましたが次の横画で引き締まりました。（中川萌翠）



墨人賞

荒野洋子（北海道）「舜」140 × 90cm

・冠上部淡墨でありながらしっかり紙に食い込み根を張ったようですばらしい。後半やや急いだからか筆が浮きがちで惜しい。（小林靖幸）

・力みが無く、意図に囚われず、最後まで書き切っておられ、大変快く感じました。この大きさと豊さに、感銘を受けました。長年、研鑽を積まれた成果だと思います。（西原 泉）



秀作賞

山﨑 直（神奈川）「海」140 × 90cm

・さんずい三点は意表を突く動きで響きも高い。つくりへの動きがやや急いだか意識が表面に出て硬いように見える。さんずいの調子の高いリズムを生かしたい。（小林靖幸）

・白の綺麗な作品でパッと目をひかれました。この作品には私の目指したい世界がある、これが第一印象でした。旁の部分の筆の落ち着いた運びがあればもっとレベルアップしたでしょうね。母の部分の右の縦画特に気になります。（畠中咲菫）



秀作賞

河合雅子（岐阜）「水」93 × 67.5cm

・はっとさせるような新鮮な水になりました。気持ちを高く持って書かれていると思います。起筆と最終画、後半で筆を生かす事に留意してください。（坂井由美）

・変化ある動きでおもしろい作品だなあと思える一方で器用にまとめられた感じがしました。（井上富子）



秀作賞

阪井明美（京都）「希」90 × 70cm

・動きが先走らず線は充実して見事です。三画目は確かさを求めて繋がりが窮屈になりました。筆を進む方向に押して行けば自然に立ち上がるはずです。線は長くても短くてもいいのです。立ち上がった筆が自律して書いてくれるはず。思い切って動いてみましょう。（渡邊佐和子）

・伸びやかな線で、気持ち良く書かれています。この文字に込められた思いが、私には、今一歩伝わりにくいと感じました。二画目の起筆が余裕と高さを持って入ると、リズムも出て良いのではないでしょうか。（西原 泉）



秀作賞

重田久子（神奈川）「奈」140 × 90cm

・二画目の左払いに目が吸い込まれる。この勢いに次の空間を意識した点と線が、果たしてこの2本の線を支えることができるのか?空間を意識して書かれたことはよく解って理解できます。（中川萌翠）

・全体の構成が素敵です。初めの三画を直線的に大胆に動き、続きを柔らかく受けました。そこに今少し間があればもっと広がりを感じられるのでは。（小笹裕子）



秀作賞

塚本宏美（北海道）「辻」135 × 69cm

・なかなかどっしりと厚みがあり、いい線ですね。引き付けるものを持っています。最初見た時、「土」という字かなと思っていました。五体字類を見て「しんにょう」を研究してみて下さい。と、私は思います。（坂中典子）

・頑張り過ぎずゆったり悠々と動いた柔らかい線がいい。が、墨量の多さによるところが大きいかもしれない。紙面に対して線が太すぎ、最終画もっと伸びやかに横に動いた線が見たいと思った。（吉松篤志）



酒井 香（静岡）「念」90 × 70cm

・紙面いっぱい一気に大きく動けて良いです。 反面、 全部の点画の比重が同じく感じられ、 単調になりました。 呼吸を感じながら書き進められたら如何でしょうか。（小笹裕子）

・ちょっと肩に力が入り過ぎかとも思えますが、 力のこもった「念」で酒井さんの求める「念」に近づいているのでしょう，そんな気がします。（矢野日出子）



秀作賞

長谷川涼子（京都）「冴」70 × 90cm

・「冫」の上から下に落ちた時作者の心がほぐれたのか腕がほぐれたのか。見る者の気持ちもほぐれました。ここから旁に移る空間が明るく澄んでいます。（林原明美）

・文字通り、冴えた線で、空間に響いています。最終画とその前の縦線の末尾で力が抜けているようで、響きが減少した点が惜しまれます。（西原 泉）



市川裕子（静岡）「近」90 × 140cm

・紙面の構想が面白く目を引く作品でした。ただ、筆を押さえつけて引っ張っているので墨の黒が白のバックから立ち上がらず、平板に見えるのが残念でした。（畠中咲菫）

・大自然の峻厳さは人間にもあり、自分や隣人の内にもある。市川作「近」の前でそう認識しなおし威儀を正します。惜しむらくはシン二ュウ、常識の枠のなかで弛緩したようです。（吉田敏子）



山田里子（東京）「幻」140 × 90cm

・先ず感じるのは空間が清潔だと言うことです。大事な資質だと思います。旁の右肩から降りる線、まだ気持ちも筆も用意が整わぬうちに腕力で引き下ろした為、ぶら下がったような力のない線となりました。（鵜飼恁生）

・しっかりと書かれていて自分でも気持ちが良かったのではないでしょうか。その調子で思い切って書いて欲しいです。もっと墨をたっぷりつけて書いたのも見たいです。（矢野日出子）



星 啓子（埼玉）「意」140 × 90cm

・草書体で「意」と書かれている。この形を選んだ作者との溶け合いがやや浅く感じられる。一画の入り方は清心なものを感じます。ただ後半の動きが紙面に溶け入らず曖昧なものになっている。この高さを活かした工夫を待ちたいと思います。（稲田宗哉）

・スッキリとして空間がきれいでした。私として欲を言えば，起筆にもう少し意識がいくと心の部分が，よりよくなる気がします。（矢野日出子）



佐藤志珠（北海道）「悟」140 × 90cm

・1画目は素晴らしいです。偏から旁に移動する線が紙面を暗くしている気がします。右上の角がぬるっと丸まらないでスパッとした筆離れの良さが出ると解決できたかもしれませんね。旁の最後は「口」なので点々で終えるともっと軽やかな躍動感が出たのでは?と思いました。（畠中咲菫）

・墨量に頼らず引き締まった線で書きとおせた。余白の白が鮮やかで綺麗（吉松篤志）



植田良司（島根）「動」140 × 90cm

・中心の縦画は大きなボリュームを持ちながら筆が立ち上がる力が有り引きしまって魅力的です。下の力の部分やや急いだか線が単調になって惜しい。（小林靖幸）

・基本はほぼ出来上がっておられるようですね。この作品の中心である縦の線は、味があり光っています。一画目の右から左へ降りてくる線を我々が研究している古典の中で学習してみてください。基本通りに筆が動けばいいのですが…。（坂中典子）



沼上 葵（京都）「冬」70 × 90cm

・線にいのちを吹き込みたいと言う願心の見える作品で好感が持てる。形の取り方にも独特の個性を感じる。さらに筆のはたらきを知ってゆけば良い作家になると思う。（鵜飼恁生）

・大きく動いて文字を捉えていることに可能性を感じます。動きから筆を見てみると、一画目、あと少しの突っ込みで紙面という限られた空間に入ることができます。足場が定まれば二画目の長い線もいきてきます。二画目を受けた三画目、なかなか面白い展開になりました。（渡邊佐和子）



福田健策（愛知）「健」90 × 70cm

・動きは実直で手堅く線は潤っています。この手堅さから一歩踏み出す努力をして、空間を自由に羽ばたいていただきたいと思います。墨人は書に自由への道を求めたのです。私たちは書いていると苦労を背負い込んでしまいますが、そこを吹っ切って歩んでまいりましょう。まずは紙からはみ出すくらい大きく、深く動いてみましょう。（渡邊佐和子）

・起筆がきちんと入れたので紙面が明るいです。ご自分のお名前で画数が多いので苦労されました。旁の一画目もこのように入れたら新しい変化が生まれたかもしれません。（林原明美）



岡田信介（静岡）「樹」70 × 90cm

・「木偏」の下部に以前の「底」の力と明るさを彷彿します。ただ「木」から「ジ ュ」へがはっきりしないので「土」から「豆」が苦しいです。（林原明美）

・「樹」「始」 久しぶりの復帰を喜びたいと思います。２点とも墨量豊に筆圧も紙面全体にゆきとどいています。「始」 の一画目、三画目の動きには他の追随を許さぬものがあります。 ただ「樹」 の二画目の縦画、「始」 の旁のあり様にやや不安定なものを感じます。京都展がたのしみです。（稲田宗哉）



岡田信介（静岡）「始」70 × 90cm

・紙面を圧する重厚な線で書き通されました。二画目から三画目へはあと一工夫の余地がありそうです。（林原明美）



鷲巣晋一（静岡）「祝」70 × 90cm

・毎回変化ある作品を出品され作品がどんどんよくなっていく、その進歩はご自身も感じられておられると思います。ただ筆が紙にくい込み墨が紙に入り込んでいる作品は少ないように思います。その点の工夫が現われと思いました。次回の作品期待しています。（井上富子）

・勢いに乗って書かれているのが伝わってきますが最後まで筆と付き合って書き進めることによって得るものがあるかと思います。実力のある方だと思いますのでさらなる期待をしています。（坂井由美）



入戸野未知（静岡）「子」90 × 70cm

・一見筆が捌けて晴れやかな表情に見えるが、思いのほか筆の穂先は固まったまま動いていませんか。力のある方ですから見ることに注力されると大きく変わると思います。（鵜飼悠生）

・流れを重視した作品と感じます。 最後の横画に視点が行き、 筆の自然な動きと見るか、 はたまた意識大にしてこの横画を捉えるかは見る者の意識に依るかと考えます。 全体に大きく動けていることは長所と言えましょう。（中川萌翠）



皇 霊一（福岡）「刻」68 × 69cm

・創作意欲が旺盛で自からの表現が素直に表れている。墨色は淡墨であるが送筆がはっきり分かるような配慮と筆力がほしい。（太田秋源）

・頑張り過ぎ、線はこう書くべきというごり押し感が強すぎるのではないか。もっと自然に、楽に筆を使い動きたい。淡墨で筆の弾力を生かし切れず、筆を揺らすことで補おうとしていて、もどかしさが残る。固定観念を捨て、もっと自由で気楽で素直な書（線）を追求して欲しいと思う。（吉松篤志）

第127回公募墨人東京展　鑑別表

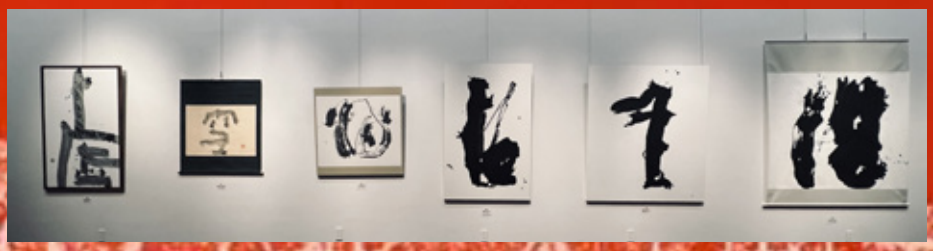
鑑別者名		稲田	井上	鵜飼	太田	小笹	坂中	坂井	中川	中森	西原	畠中	林原	吉田	吉松	矢野	渡邊
公募出品者氏名	作品題名																
荒野洋子	舜	B	A	B	A	B	B	A	A	B	A		A	A		A	B
市川裕子	近	B	B	C	B	B	A	B	B	B	C	C		B	B		B
入戸野未知	子	C		C	C	C	C	C	C	C	B	C					
植田良司	動	B	C	B	C	B	A	C	C		C	B		C	C		C
岡田信介	始	B	B		B	B	C	B	B	C		B		B	C		
岡田信介	樹	B	C		C	A	C	C	C	C	C	C	C		C		C
河合雅子	水	A	C	B	B	C	B	C	C		B	B		B	A		
佐藤志珠	悟	B	B	C	C	C	C	B	B	B	A	B	B	B	B		
阪井明美	希	A	B	A	C	A	B	B	C	C	C	B	A	B	B	C	C
酒井 香	念	B	C	B	B	C	C	C	C		B	C		C	C		B
重田久子	奈	B	C	C	B	C	C	C	B	C		C	B	C		C	
城　克汎	悟	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B	C	C	A	C	C
皇（宇野）霊一	刻	C	C	C	C	B		C	B			C		C	C	C	
塚本宏美	辻	C	C	C	A	B	A	B	A	A	C	A		B	B		C
沼上 葵	冬	B	B	B	B	B	C	C	B			C	C	C	C	C	B
長谷川涼子	冴	B	B	C	C	C	A	C	B		B	B	B	C	A	B	B
福田健策	健	C	B	C	C	C	B	C	B	C		C	B	C		A	C
星 啓子	意	C	C	C	C	C	C	B	B	C	C	C	C	C		C	B
茂木明子	聖	A	B	A	B	A	B	A	C	A	C	A	B	A	C	C	A
山﨑　直	海	A	A	A	B	A	B	A	B	A	C	A	A	A	C	B	A
山田里子	幻	B	C	C	C	C	C	C	B	C	B	B	C	C	C	C	C
鷲巣晋一	祝	C	C	B	B	C	C	C	C	C	C	C					C

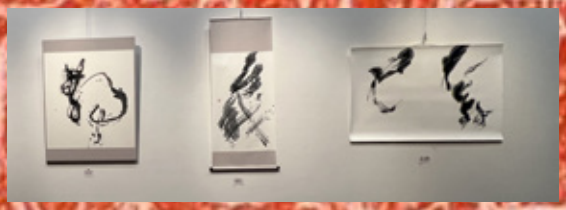
※鑑別については　各会員の判断に任せ、A評価、B評価、C評価の点数は決めていません。会員の判断に任せますが、A から順に優秀とします。

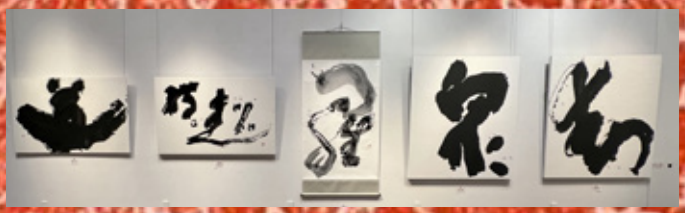
第127回 公募墨人東京展　審査結果

◎墨人賞　○秀作賞

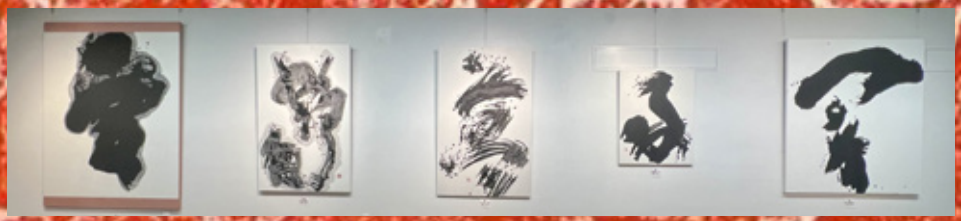
公募出品者	作品	稲田	井上	鵜飼	太田	小笹	坂中	坂井	中川	中森	西原	畠中	林原	吉田	吉松	矢野	渡邊
荒野洋子	舜				◎		◎	◎	◎		◎	◎		◎			
河合雅子	水										○						
阪井明美	希			○		○		○									○
重田久子	奈												○				
城　克汎	悟									○					○		
塚本宏美	辻						○		○								
長谷川涼子	冴															○	
茂木明子	聖				○												
山﨑 直	海	○	○									○		○			











発　　行　No.751 2025年（令和七年）5月号
編　　集　稲田宗哉
発 行 所　墨人会事務所
〒611-0041 京都府宇治市槇島町
一ノ坪312　稲田宗哉 方
TEL.0774-22-4550
Fax.0774-21-3973
送金は必ず振替で
●振替 00800-4-134295 墨人会事務部
制作・印刷　プロモ・プラスワン

https://bokujin.com

『墨美』NO.74 / 1958 [開通褒斜道石刻] 全影　より